慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	集中授業「アウトドアレクリエーション」における学生による授業評価： 経年変化及び参加者が意識する効果について
Sub Title	Student evaluation in the outdoor recreation intensive course : comparison between student evaluation in 1996 and 1998, and effect which students were conscious
Author	野口, 和行(Noguchi, Kazuyuki) 吉田, 泰将(Yoshida, Yasumasa) 佐々木, 玲子(Sasaki, Reiko) 村山, 光義(Murayama, Mitsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1999
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.38, No.1 (1999. 1) ,p.67- 74
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study was to compare student evaluation of five-days outdoor recreation intensive course in Keio university conducted in 1996 and 1998, and investigate effects which students were conscious. The subjects were a total of 43 male and female students. To measure student evaluation, the questionnaire including 34 items was administered. To measure effect which students were conscious, the composition describing their impression of the outdoor recreation intensive course was administered. The following results are obtained: 1) 69.0% of students evaluated outdoor recreation intensive course "very good". 2) Optional program, night program and recommendable lesson were evaluated negatively between outdoor recreation intensive course conducted in 1996 and 1998. But the means of each item were 4.0, students evaluated outdoor recreation intensive course conducted in 1998 positively. 3) 44.0% of students were conscious of natural recognition, 37.2% of students were conscious of the cooperation, and 34.9% of students were conscious the encounter.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00380001-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

集中授業「アウトドアレクリエーション」における学生による授業評価

——経年変化及び参加者が意識する効果について——

野口　和行*　　吉田　泰将**
佐々木玲子***　　村山　光義**

Student Evaluation in the Outdoor Recreation Intensive Course
—— Comparison between student evaluation in 1996 and 1998, and effect which students were conscious ——

Kazuyuki Noguchi[1]　Yasumasa Yoshida[2]
Reiko Sasaki[3]　Mitsuyoshi Murayama[2]

Abstract

The purpose of this study was to compare student evaluation of five-days outdoor recreation intensive course in Keio university conducted in 1996 and 1998, and investigate effects which students were conscious. The subjects were a total of 43 male and female students. To measure student evaluation, the questionnaire including 34 items was administered. To measure effect which students were conscious, the composition describing their impression of the outdoor recreation intensive course was administered.

The following results are obtained:

1) 69.0% of students evaluated outdoor recreation intensive course "very good".
2) Optional program, night program and recommendable lesson were evaluated negatively between outdoor recreation intensive course conducted in 1996 and 1998. But the means of each item were 4.0, students evaluated outdoor recreation intensive course conducted in 1998 positively.
3) 44.0% of students were conscious of natural recognition, 37.2% of students were conscious of the cooperation, and 34.9% of students were conscious the encounter.

Key words ; Intensive Course, Student evaluation, Comparison
キーワード；集中授業，授業評価，経年変化

はじめに

近年，大学教育の充実に向けての自己点検，自己評価に関する関心が高まり，大学体育においても学生による授業評価が行われている。大学体育における集中授業の授業評価については既にいくつかの報告があり[1)2)4)5)]，筆者ら[6)]も集中授業「アウトドアレクリエーション」の授業評価を行い，授業の総合評価に寄与する要因として，「授業の成果」に関する項目

* 慶應義塾大学体育研究所助手　[1]Assistant of the Institute of Physical Education, Keio University.
** 慶應義塾大学体育研究所専任講師　[2]Assistant professor of the Institute of Physical Education, Keio University.
*** 慶應義塾大学体育研究所助教授　[3]Associate professor of the Institute of Physical Education, Keio university.

及び「授業の方法・内容」に関する項目があったことを報告した。その際，今後の課題として縦断的な調査の実施，自由記述の分析方法などの多角的な分析・評価を今後の課題として挙げた。

授業評価の縦断的研究では，綿ら（1994）[7] が集中授業「マリン」における3年間の経年変化について，学生の授業に対する総合評価と各設問項目の回答の平均値の分散分析を行い，検討している。

また，自由記述による授業の評価としては，中村（1998）[9] が，橘ら（1984）[8] による「キャンパー側の視点によるキャンプ効果の類型」を参考にして8つの観点から学生の感想文を分類し，参加者が意識する授業の効果について報告している。

授業の評価にあたっては，授業担当者が意図する項目を検討するだけでなく，学生が意識する効果について評定することも重要であると考えられる。

そこで，本研究では，集中授業「アウトドアレクリエーション」を事例に学生による授業評価を行い，1996年度の報告と併せて経年変化を検討するとともに，自由記述の感想文を分析することにより，学生が意識する授業の効果を検討し，今後の授業の充実に関する基礎資料を得ることを目的とする。

方　　法

1．調査対象

調査対象は，1998年7月22日～26日に，長野県立科町の慶應義塾立科山荘を中心として行われた集中授業「アウトドアレクリエーション」に参加した，男性32名，女性11名の計43名である。

2．授業の概要

本授業では，自然の中で行われるレクリエーショナルな活動を通して，周囲の自然環境の理解，自然の中での各活動に関する技術とそれに関わる様々な知識の習得，集団生活を通しての人間関係の理解，を目的としている。事前に1回のオリエンテーションを実施し，授業の目的や内容について説明した。実習中は6名～8名で班を構成し，各班に1名の教員がついた。各プログラムは6名の教員が指導を担当した。2日目はイニシアティブゲーム等班別の活動を行った。，3日目の身体活動を主としたプログラム・4日目の静的な活動を主としたプログラムは学生の自由選択とした。その他，自由参加のプログラムも実施した。1996年度と大きく異なるのは，2日目を班単位の活動とした点である。基本的には宿舎泊であるが，希望者はテント泊，テントを使用せずシートを使って簡便なシェルターを作り一晩を過ごすビバークも行った。5日間のスケジュールを表1に示す。

3．調査及び手続き

1）授業評価

授業評価は，綿ら[5]，本間ら[1] の研究を参考に作成した34項目（5段階評価）からなる無記名式の調査用紙を用いた。内容は，授業の目標に関する項目（10項目），授業の方法・内容に関する項目（10項目），授業の成果に関する項目（5項目），コミュニケーションに関する項目（3項目），自己評価に関する項目（3項目），及び授業の総合評価が含まれている。この調査用紙を実習最終日閉講式直前に配布・回収した。

結果の処理は，市販の統計ソフト Visual Stat を用いた。

2）自由記述による本授業の効果の評定

実習最終日に，実習を終えて感じたこと，考えたことについて特にテーマを定めずに自由に記述させた。自由記述については記名式で行った。

感想文の評定にあたっては，橘ら[8] による「キャンパー側の視点によるキャンプ効果の類型」，中村[9] の「キャンパー

が意識するキャンプの効果」を参考にし，①親和・協調性，②邂逅（思いがけなく出会うこと，めぐりあうこと），③自律・自発性，④自己拡大，⑤自然認識，⑥自己客観視，⑦野外生活（または日常生活の便利さ），の7つの観点から，「効果が見られる」を1点，「効果が見られない」を0点として評定した。評定者は4名である。

表1　本授業のスケジュール

	7月22日（水）	7月23日（木）	7月24日（金）	7月25日（土）	7月26日（日）
5:00				自由参加による 周辺の散策	
6:00					
7:00		朝食作り 朝　食	朝　食	朝　食	朝　食
8:00					
9:00			身体活動を主とした 自由選択プログラム	静的な活動を主とした 自由選択プログラム	撤　収
10:00		班別活動 （イニシアティブゲーム）	・カヌー・カヤック ・トレッキング ・ピークハンティング ・サイクリング	・読　書 ・クラフト ・ケーキ作り ・折り紙 ・自然観察等 ・座　禅	ふりかえり
11:00		昼食づくり			
12:00		昼　食	（昼　食）	（昼　食）	閉講式・解散
13:00	現地集合 開講式・ オリエンテーション	班別活動 （女神湖散策）			
14:00					
15:00	テント設営 アウトドアクッキング	フリータイム	帰　着	パーティー準備	
16:00			フリータイム		
17:00	夕　食			各班メニュー持ち よりの会食形式の パーティー	
18:00		夕　食	夕　食		
19:00		選択活動別ミーティング	自由参加による ナイトプログラム		
20:00					
21:00					
22:00	就　寝 （希望者はテント泊）	就　寝 （希望者はテント泊）	就　寝 （希望者はテント泊 またはビバーク）	就　寝 （希望者はテント泊 またはビバーク）	
23:00					

結果と考察

1. 授業評価の結果

授業評価に関する調査を行ったところ，42名から有効回答が得られた。各質問項目の回答に対し，「全くそう思う」

から「全くそう思わない」（1点）を与え，平均，標準偏差を算出した。その結果を表2に示す。

授業の目標については，「全くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的評価が，「危険性の認識と自己の安全の確保」（40.5％）においてやや低い傾向を示したが，その他の目標においては60％以上の参加者が肯定的評価をしており，授業の目標は概ね達成できたと考えられる。

表2　授業評価の結果

N＝42

項　　目	V5	V4	V3	V2	V1	V5+V4	Mean	S. D.
授業の目標に関する項目								
1. 自然の中での様々な活動に関する基礎的な技術が習得できた	23.8	59.5	9.5	7.1	0.0	83.3	3.98	.79
2. 自然の中でのルール、エチケット、マナーが理解できた	47.6	40.5	7.1	4.8	0.0	88.1	4.29	.81
3. 周りの自然環境に対する理解が深まった	45.2	31.0	19.0	4.8	0.0	76.2	4.15	.91
4. 自然の中での過ごし方についてバリエーションが広がった	61.9	31.0	4.8	2.4	0.0	92.9	4.51	.71
5. 危険性の認識と自己の安全の確保についで理解できた	11.9	28.6	45.2	14.3	0.0	40.5	3.37	.89
7. 集団生活のルール、エチケット、マナーについて理解できた	26.2	54.8	16.7	2.4	0.0	81.0	4.05	.74
8. 自然の中での身体的な活動について認識が深まった	31.0	57.1	11.9	0.0	0.0	88.1	4.17	.63
9. 自然の中での静的な活動について認識が深まった	33.3	33.3	28.6	2.4	0.0	66.7	3.98	.86
10. 運動量は十分確保されていた	52.4	16.7	21.4	7.1	2.4	69.0	4.10	1.14
13. 生涯スポーツとしての各種アウトドアスポーツを認識できた	40.5	28.6	28.6	2.4	0.0	69.0	4.05	.89
授業の方法・内容に関する項目								
14. 班分けの方法は適切であった	33.3	33.3	28.6	4.8	0.0	66.7	3.98	.91
15. 事前のオリエンテーションは良かった	11.9	21.4	57.1	4.8	2.4	33.3	3.27	.90
16. テント・タープの設営実習は良かった	42.9	40.5	14.3	2.4	0.0	83.3	4.22	.79
17. アウトドアクッキングは良かった	66.7	21.4	9.5	2.4	0.0	88.1	4.51	.78
18. 各種選択プログラムは良かった	57.1	26.2	16.7	0.0	0.0	83.3	4.39	.77
19. ナイトプログラムは良かった	52.4	11.9	26.2	9.5	0.0	64.3	4.05	1.09
20. モーニングプログラムは良かった	40.5	19.0	38.1	2.4	0.0	59.5	4.00	.95
21. 会食形式のパーティーは良かった	73.8	21.4	4.8	0.0	0.0	95.2	4.68	.57
29. 授業の時間配分は適切であった	33.3	28.6	33.3	4.8	0.0	61.9	3.90	.94
30. 授業の理解を深めるための補助手段は適切に用いられていた（VTR、プリント、レポートなど）	14.3	11.9	59.5	7.1	4.8	26.2	3.25	.98
授業の成果に関する項目								
11. 理論と実技を関連づけで学習できた	14.3	28.6	38.1	16.7	2.4	42.9	3.32	.99
12. 大学生としてふさわしい授業であった	50.0	26.2	23.8	0.0	0.0	76.2	4.24	.83
24. 授業は創造性に富むものであった	45.2	31.0	19.0	4.8	0.0	76.2	4.17	.92
25. この授業から触発されるものが多かった	54.8	33.3	9.5	2.4	0.0	88.1	4.41	.77
26. この授業から自分の期待していたものが満足された	47.6	33.3	11.9	7.1	0.0	81.0	4.22	.94
コミュニケーションに関する項目								
6. 友人や教師とのコミュニケーションについて理解できた	38.1	52.4	9.5	0.0	0.0	90.5	4.27	.63
22. 教師とのコミュニケーションは十分であった	45.2	28.6	21.4	2.4	2.4	73.8	4.15	.99
23. 学生とのコミュニケーションは十分であった	35.7	45.2	14.3	4.8	0.0	81.0	4.12	.84
指導者に関する項目								
27. 教師は十分な知識を持っていた	73.8	9.5	9.5	0.0	0.0	83.3	4.63	.66
28. 教師は十分に準備し熱意を持っていた	78.6	14.3	7.1	0.0	0.0	92.9	4.71	.60
評価に関する項目								
31. 私はこの授業を真剣に学ぼうと努力した	47.6	28.6	23.8	0.0	0.0	76.2	4.28	.82
32. 私はこの授業期間を通して常に出席しようと心がけた	57.1	26.2	14.3	2.4	0.0	83.3	4.39	.83
33. 私はこの授業を他の学生に薦めたい	66.7	21.4	11.9	0.0	0.0	88.1	4.56	.71
総合評価								
34. 授業の総合評価	69.0	31.0	0.0	0.0	0.0	100.0	4.71	.46

V1：全くそう思う　V2：そう思う　V3：どちらともいえない　V4：そう思わない　V5：全くそう思わない（1点）

また，授業の総合評価においても「非常に良かった」が全体の69.0％を占め，「良かった」の31.0％を合わせると肯定的評価が100％であり，平均が4.71であったことから本授業の評価は高かったといえる。

授業の総合評価，授業の目標に関する項目を除く23項目中において肯定的評価の高かった項目は，「会食形式のパーティーはよかった」（95.2％），「教師は十分に準備し，熱意を持っていた」（92.9％），「アウトドアクッキングはよかった」（88.1％），「この授業から触発されるものが多かった」（88.1％）であった。

逆に相対的に肯定的に評価が低く，改善を要すると考えられる項目は，「授業の理解を深めるための補助手段は適切に用いられていた」(26.2％)，「事前のオリエンテーションはよかった」(33.3％)，「理論と実技を関連づけて学習できた」(42.9％) であった。

2. 授業評価の経年変化

授業評価の経年変化を調べるために，1996年度の結果及び1998年度の結果について各項目毎にt検定を行い，検討した。その結果を表3に示す。

表3　授業評価の経年変化及びt検定の結果

N＝42

項　目	1996年度 Mean	1996年度 S. D.	1998年度 Mean	1998年度 S. D.	t値
授業の目標に関する項目					
1. 自然の中での様々な活動に関する基礎的な技術が習得できた	3.73	.73	3.98	.79	1.66
2. 自然の中でのルール，エチケット，マナーが理解できた	4.18	.69	4.29	.81	.79
3. 周りの自然環境に対する理解が深まった	4.02	.82	4.15	.91	.77
4. 自然の中での過ごし方についてバリエーションが広がった	4.25	.87	4.51	.71	1.60
5. 危険性の認識と自己の安全の確保について理解できた	3.52	.98	3.37	.89	−.71
7. 集団生活のルール，エチケット，マナーについて理解できた	4.00	.72	4.05	.74	.31
8. 自然の中での身体的な活動について認識が深まった	4.05	.86	4.17	.63	.89
9. 自然の中での静的な活動について認識が深まった	4.14	.93	3.98	.86	−.82
10. 運動量は十分確保されていた	4.14	.90	4.10	1.14	−.19
13. 生涯スポーツとしての各種アウトドアスポーツを認識できた	4.27	.69	4.05	.89	−1.17
授業の方法・内容に関する項目					
14. 班分けの方法は適切であった	3.95	.81	3.98	.91	−.01
15. 事前のオリエンテーションは良かった	3.50	1.07	3.27	.90	−.88
16. テント・タープの設営実習は良かった	4.16	.89	4.22	.79	.44
17. アウトドアクッキングは良かった	4.64	.57	4.51	.78	−.77
18. 各種選択プログラムは良かった	4.84	.37	4.39	.77	−3.38＊
19. ナイトプログラムは良かった	4.65	.68	4.05	1.09	−3.01＊
20. モーニングプログラムは良かった	4.15	.81	4.00	.95	−.96
21. 会食形式のパーティーは良かった	4.77	.48	4.68	.57	−.73
29. 授業の時間配分は適切であった	4.09	.77	3.90	.94	−1.01
30. 授業の理解を深めるための補助手段は適切に用いられていた	3.61	.78	3.25	.98	−1.94
授業の成果に関する項目					
11. 理論と実技を関連づけて学習できた	3.48	.90	3.32	.99	−.58
12. 大学生としてふさわしい授業であった	4.30	.73	4.24	.83	−.20
24. 授業は創造性に富むものであった	4.14	.77	4.17	.92	.17
25. この授業から触発されるものが多かった	4.32	.93	4.41	.77	.47
26. この授業から自分の期待していたものが満足された	4.41	.72	4.22	.94	−1.09
コミュニケーションに関する項目					
6. 友人や教師とのコミュニケーションについて理解できた	4.23	.74	4.27	.63	.39
22. 教師とのコミュニケーションは十分であった	4.07	.87	4.15	.99	.25
23. 学生とのコミュニケーションは十分であった	4.16	.75	4.12	.84	−.24
指導者に関する項目					
27. 教師は十分な知識を持っていた	4.39	.65	4.63	.66	1.81
28. 教師は十分に準備し熱意を持っていた	4.77	.42	4.71	.60	−.53
自己評価					
31. 私はこの授業を真剣に学ぼうと努力した	4.27	.87	4.28	.82	−.02
32. 私はこの授業期間を通して常に出席しようと心がけた	4.50	.66	4.39	.83	−.74
33. 私はこの授業を他の学生に薦めたい	4.84	.47	4.56	.71	−2.26＊
総合評価					
34. 授業の総合評価	4.82	.39	4.71	.46	−1.38

＊＜.05

授業の総合評価は1996年度と比較して有意な差は認められなかった。しかし，他大学において総合満足度の指標として用いられている「この授業を他の学生に勧めたい」の項目において1996年度と比較して有意に低い評価値を示して

いる。しかし，1996年度の評価値が4.84という非常に高い値であること，1998年度も4.5以上という高い値を示していることから，総合評価については1996年度に比べると低くなったものの，高い評価を得ていると考えられる。

各項目別に見ると，授業の目標に関する項目では有意な差は見られなかったが，「危険性の認識と自己の安全の確保について理解できた」，「自然の中での静的な活動について認識が深まった」，「生涯スポーツとしての各種アウトドアスポーツを認識できた」を除いて1996年度よりも高い評価値を示しており，前項でも述べたように，授業の目標は概ね理解され，達成されたと考えられる。

授業の方法・内容に関する項目では，「各種選択プログラムはよかった」，「ナイトプログラムはよかった」の項目において1996年度と比較して有意に低い評価値を示している。これは，1998年度の天候が不順で，3日目の天候が雨だったことが影響していると考えられる。しかし，平均値が4.0以上あることから，授業の方法・内容についても1996年度同様，概ね高い評価を示していると考えられる。しかし，「理論と実技を関連づけて学習できた」，「事前のオリエンテーションはよかった」，「授業の理解を深めるための補助手段は適切に用いられていた」の3項目については，1996年度から評価値も上がっておらず，改善の結果が表れなかった。事前のオリエンテーションについては，日程を延長した都合で1回にせざるを得ず，このような結果になったと考えられるが，事前に配布するしおりを充実させるなどさらなる改善の余地があるといえよう。

3. 自由記述による実習の効果

参加者が意識する本授業の効果を評定し，表4に示した。「自然認識」を意識する参加者が最も多く，19名（44.2％）であった。「自然認識」に関する記述では，「暗闇の中を1人で歩く経験をしたとき，自然を強く感じ，鳥の鳴き声や木々のざわめきなどのメッセージを受け取ることができたと思う」，「今までに自分は自然を素通りしていたことに気づいた」，「思いのほか，自然の音が大きいことに気づいた」，「自然を近くに感じられるようになった」，「あのとき見た山の景色，湖の景色，風の強さ，雨の冷たさ，日光の暖かさ，今は全てが忘れられない」等があった。

本授業は自然を背景とした活動を中心としており，暗闇の中を1人で歩くなど自然を強く意識するプログラムが組まれている。また，1998年度は毎日雨が降るなど天候も著しく変化し，参加者がより強く自然を意識する条件がそろったと考えられる。

次に「親和・協調性」を意識する参加者が多く，16名（37.2％）であった。「親和・協調性」に関する記述では，「ここで出会った人たちとは自然に話を交わし，遊ぶことができた」，「班の1人1人も私にとってとても大きな存在へと変わっていったような気がする」，「みんなで心を1つにして協力して作った料理の方が本当においしい」，「仲間を本当に信じる，仲間から本当に信じられる，そんな人間に一歩でも近づけるようにこれからも頑張っていきたいと思う」等があった。

続いて，「邂逅」を意識する参加者が多く，15名（34.9％）であった。「邂逅」に関する記述では，「自分にとって誰とでも友達になれた小さい頃を思い出させる気がした」，「この授業に参加している全ての人々が愛しくてたまらない」，「5日間が短いと思えるのは，この立科で多くの友達と出会い，共に楽しい時間を過ごしてきたからであろう」，「キャンプで同じ班に偶然なっただけで私たちはお互いのスペースに入って遊べた」等の記述があった。

本授業では，生活班がベースになってテントを設営したり，料理をしたり，班別活動でイニシアティブゲーム等を行うことにより，日常生活とは違った濃密な人間関係を生み出し，親和・協調性や思いがけない出会いを強く意識することになると考えられる。

Smissen[10] はキャンプ効果の種々の分類を総括し，「個人と環境との関係」，「個人と他者との関係（社会的行動）」，「個人と自分自身との関係（個人の拡大）」の3つをキャンプのテーマとしてあげている。この3つを当てはめると本授業では，「個人と環境との関係」，「個人と他者との関係」について参加者が強く意識をしたといえよう。

表4　キャンパーが意識するキャンプ効果

ID	親和・協調性	邂　　逅	自立・自発性	自己拡大	自己客観視	自然認識	野外生活
1	○					○	
2	○					○	
3					○	○	
4	○			○	○		
5	○						
6		○					
7				○		○	○
8	○			○	○		
9		○					
10						○	○
11							○
12	○		○				
13							
14	○	○			○		
15	○			○		○	
16	○				○		
17	○						
18		○					
19		○					
20				○			
21		○					
22		○				○	
23					○	○	
24	○						
25					○	○	
26	○	○					
27		○			○	○	
28		○					
29		○			○		
30					○	○	
31	○					○	
32				○			
33					○	○	
34	○						
35	○			○			
36							
37	○						
38		○				○	
39		○				○	
40	○					○	
41						○	
42		○			○	○	
43						○	
計 %	16 32 %	15 34.9 %	0 0.0 %	8 18.6 %	12 27.9 %	19 44.2 %	3 7.0 %

ま と め

本研究は，1998年7月に実施された集中授業「アウトドアレクリエーション」履修者43名を対象に，学生による授業評価を行い，1996年度の報告と併せて経年変化を検討するとともに，自由記述の感想文を分析することにより，学生が意識する授業の効果を検討し，今後の授業の充実に関する基礎資料を得ることを目的とした。

その結果，以下のことが明らかになった。

1. 授業の総合評価では，「非常に良かった」が全体の69.0％を占め，「良かった」の31.0％を合わせると肯定的評価が100％であり，平均が4.71であったことから本授業の評価は高かったといえる。
2. 授業評価の経年変化では，「各種選択プログラムは良かった」，「ナイトプログラムは良かった」，「この授業を他の学生に勧めたい」の3項目において，1996年度と比較して有意に低い評価値を示している。しかし，1998年度の評価値は

いずれも4.0を超えていることから概ね高い評価を示していると考えられる。

3. 学生が意識する授業の効果を評定したところ，「自然認識」を意識する参加者が最も多く，19名（44.2％）であった。以下，「親和・協調性」16名（37.2％），「邂逅」15名（34.9％）であった。

本研究では，質問紙に加え，自由記述の分析も加え授業評価を行ってきたが，今後の課題としては，中村が述べているように，授業直後よりも期間をおいて改めて授業を振り返ったときに意識される効果もあることから，調査の実施時期についても検討していく余地があると思われる。

《文　献》

1）本間崇・千足耕一・布目靖則・南隆尚（1995）正課体育スキー実習における学生による授業評価，大学体育研究，第17巻，第1号，pp. 49–56.

2）舛本直文・綿祐二（1993）大学体育における学生評価「保健体育講義」と「体育実技コース：マリン」の経年変化を中心に，東京都立大学体育学研究，第18号，pp. 61–67.

3）森敏生（1994）自然と文化を志向した大学体育の模索（編）全国大学体育連合「大学体育の展開－授業実践・シラバス－」，pp. 43–51，（社）全国大学体育連合.

4）中野友博・飯田稔・井村仁・宍戸和行・福島邦男（1992）学生による授業評価の試み－筑波大学　体育専門学群野外運動理論・実習（雪上）を事例として－，日本体育学会第43回大会号B，pp. 768.

5）綿祐二・舛本直文（1993）「体育実技Bコース：スキー」における学生による授業評価，東京都立大学体育学研究，第18号，pp. 53–59.

6）野口和行・吉田泰将・佐々木玲子・村山光義・田中伸明（1997）集中授業「アウトドアレクリエーション」における学生による授業評価－総合評価に寄与する要因について－」，慶應義塾大学体育研究所紀要，第36巻，1号，pp. 67–74.

7）綿祐二・舛本直文（1994）大学体育における学生評価：4．体育実技Bコース『マリン』の経年変化処理，東京都立大学体育学研究，第19号，pp.57–61.

8）橘直隆・川村協平・星野敏男（1984）キャンパー側の視点によるキャンプ効果の因子分析的研究，中京女子大学紀要，第18号，pp. 171–77.

9）中村正雄（1998）キャンプの評価－キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として－，第2回日本キャンプ会議抄録集，pp. 49–52.

10）Van der Smissen, B. (1975) Reseach camping and environmental education. The Pennsylvania State University, U.S.A.